

第 **30** 号…令和5年1月

協会だより



一般社団法人 関東地域づくり協会

3 新年のごあいさつ

4 卯年 年男、今年もよろしくお願いします。

6 関東地域づくり協会からのお知らせ

関東・水と緑のネットワーク拠点 令和4年度交流会
道の駅へ防災倉庫・防災資材を寄贈しました
関東地方防災エキスパート活動状況
令和4年度 関東地方防災エキスパート支部別講習会を実施しました
第35回 道のある風景写真コンクール

10 プロジェクトK46

安心・安全と環境への配慮、 新たな川づくりが街づくりの基礎に

北千葉導水事業 第二導水路・大堀川・坂川

14 関東の宿場町⑩

甲州街道 小原宿 神奈川県

16 関東の土木遺産⑦

聖橋 東京都

18 会員のひろば

私の趣味

19 会員情報

新会員紹介・お悔やみ
編集委員会だより

20 ピックアップ 関東の「道の駅」④

若い人々にアピール！ 豊かな自然を楽しめる滞在型道の駅

道の駅「たかねざわ 元気あっぶむら」



表紙の言葉

そのべあいさ
園部亜唯彩さん（茨城大学教育学部附属中学校2年生）

雪の朝を歩く

この写真は当協会が主催する第35回「道のある風景写真コンクール」で中学校の部銀賞に選ばれた作品です。「この日は、久しぶりに大雪が降った冬の早朝でした。朝からスキーウェアを引っ張り出してスノーブーツを履き、一面の銀世界に飛び出していきました。思い切り雪合戦をしたり雪だるまを作ったり、久しぶりの雪遊びを堪能した後、帰路に着く姉弟の写真です。遊び尽くして楽しく会話をしながら帰る道すがら、朝日が昇って木々に積もった雪が溶けだして雪道にばたばたと水滴が落ち、光に反射したその雪道が幻想的で、この一枚を写真に収めました。雪の日の楽しい思い出が詰まった姉弟の写真です」

理事長あいさつ 新年のごあいさつ

(一社) 関東地域づくり協会 理事長
奥野晴彦



令和5年の年頭に当たり、一言ごあいさつ申し上げます。今年の年初は関東では穏やかな日が続きました。会員の皆様には、今年こそ、このような穏やかな年になってほしいとの気持ちで新年をお迎えになられたことと思います。

昨年是一言で言って「大変な年」でした。一年を象徴するとして選ばれた漢字が「戦」であったように、ロシアのウクライナへの侵攻による激しい戦闘が続き、新型コロナウイルス感染の拡大のため、世界各地で人々がウイルスとの「戦」を余儀なくされた年でありました。また、エネルギー、食糧などの資源の逼迫、世界的な供給網の機能不全からの資材、商品不足に伴い世界各国でインフレが昂進しました。加えてわが国では円安による物価上昇など、私たちの生活の面でも様々な戦いをしなければならない年でした。さらに安倍元総理が襲撃され亡くられるという不幸な事件もありました。地震や豪雨による災害も引き続き多発するなどまさに「大変な年」でした。

新年早々暗い話題ばかりになりましたが、明るい話題がなかったわけではありません。サッカーや野球などスポーツの面でわが国の選手が大いに活躍した話題で盛り上がりました。

また、夏の参議院選挙で当会会員である足立議員が再選を果たされたのも、朗報でした。足立議員の一層のご活躍を祈念いたします。

さて今年はどうのような年になるのでしょうか。卯年ということで、穏やかだけでも飛躍の年になってもらいたいと念じていますが、現実には厳しそうです。コロナは第8波の最中にあり、ウクライナ情勢も展望が開けていません。海外の経済停滞も懸念されていますし、わが国の周辺も「波高し」という状況にあるようです。これらに対処するため、政治、経済、国民生活のあらゆる面で、柔軟かつ臨機応変な対応が求められます。

一方、「ウイズコロナ」、「ポストコロナ」ということが言われるようになってきており、人々の活動が活気を取り戻しつつあります。海外からのインバウンドの増加も目立ってきました。活発になってきた人々の活動を支え、安全で活力ある国土を構築するためには、優れたインフラの機能増進が引き続き求められます。昨年暮れ、防災・減災、国土強靱化対策を盛り込んだ補正予算が決定されました。

今後審議される令和5年度予算と合わせ、早期かつ着実な執行が望まれます。

協会は平成25年に弘済会から移行してちょうど10年経過します。その使命は、インフラ整備事業の円滑な推進を図り、国土の健全な発展に寄与することにあります。この10年で協会の実施する事業の内容や規模が大きく変化する中、新しい分野にも積極的に対応しつつ、なんとかその使命を果たし、次の10年に向けた基盤を構築できたのではないかと考えております。

公益事業は、地域活性化事業、防災事業、環境保全事業など6本の事業を柱として取り組んでいます。防災エキスパートの皆さんの活躍により、災害発生時の調査・復旧活動支援のほか、平常時の点検、防災技術の伝承などで大きな成果を上げて参りました。地域活性化事業や環境保全事業では、地域の皆さんの様々な取組を支援し、皆さんの活動の継続、拡大に貢献できたものと考えております。ただ、近年コロナの影響で、このような活動が一時規模縮小や中断されたのは残念でありましたが、最近少しずつ復活の兆しがあるようです。このほか、インフラの役割、効果等に関する講演会、広報活動や技術開発等にも成果をあげています。

収益事業では、インフラの整備や管理事業の進捗管理や関係機関との調整を行う事業監理業務、公共事業の品質を確保するための第三者品質証明事業などを実施し、相応の成果を上げて参りました。

これらの事業を通じ、協会活動に対する期待は益々高まってきているものと確信しております。

今年は、新しい10年の1年目ということで、新しいことへのチャレンジを含め、職員一同知恵と力を振り絞って、これまで以上に積極的に取り組んで参ります。このため、人手不足の折、業務の効率化や生産性向上のための新しい技術の研鑽を進める必要があります。また、職員の高齢化も進んでいることから、新しい人材の確保も重要な課題です。技術の研鑽、人材の確保などの面で、会員の皆様の一層のご指導、ご協力をお願いいたします。

今年一年が皆様にとって素晴らしい年となることを祈念し、新年のごあいさつといたします。

令和5(2023)年

卯年

年男、
今年もよろしく
お願いします。

6度目の卯年、72歳ですか

昭和26(1951)年生まれ

上野慶次さん

(株)東日本エンジニアリング
元用地部用地調整官

あけましておめでとうございます。

普段、年齢を感じることなく生活をしておりまして、原稿の依頼をいただきあらためて振り返ると6度目の年男、72歳かと痛感した次第です。

昭和49年に23歳で建設省関東地方建設局千葉国道工事事務所用地課に採用され、在職中には外環道（埼玉県川口市から三郷市間）、圏央道（埼玉県川越市、鶴ヶ島市：東京都あきる野市から八王子JCT間）にも携わり、周囲の方々に支えられて35年勤め、平成21年に早期退職をいたしました。

その後、一般社団法人勤務を経て、平成24年から現在の会社に勤務しております。今でも用地に関する業務に携わっていますが、通算で約半世紀になろうとしています。

体力的には、今まで入院などを伴う大病もせず、薬を常時服用することもなく生活しております。ただし、視力、聴力、歩行速度などは年齢とともに落ちてきているように感じます。

趣味というほど胸を張れるものではありませんが、これからは平成25年頃から始めた神社やお寺の御朱印集めをのんびりと続けながら、7度目の年男となることを目指して健康に生活ができるよう努めたいと思っています。

いまだコロナの鎮静化が見えず、感染防止に気を使う状況ですが、皆さまにとって2023年がよい年となりますようにお過ごしください。

今後ともよろしくお願いいたします。



ゴルフ「ベストスコア!」を目指して

昭和26(1951)年生まれ

渡邊義臣さん

(株)竹中土木 部長
元長野国道事務所長

謹んで新年のお喜びを申し上げます。

毎年の干支への関心も希薄になりつつあった今年、「え……、そうか年男だったのか」と私。今日までた

くさんの先輩、同僚、後輩に支えられ、おかげさまで充実した思い出をたくさんいただいた。昭和45年大阪万博、いざなぎ景気の最中、関東地方建設局に入省。最初の配属先で山梨県内の道路整備事業の大きさにわくわくした。東京外環道路・東京湾環状道路などの道路事業、工事積算、国営公園整備事業、積算基準などのマネジメント、新技術支援・活用促進策そして総合評価落札方式の仕組みづくりにも携わる機会をいただいた。

私事でも、スキー、魚釣り（本誌第8号〈平成27年10月号〉にて報告）、社交ダンス競技会そしてゴルフなど、楽しい思い出だけが残っている。

再就職先の一般財団法人全国建設研修センターを経て、今は株式会社竹中土木で工事積算・入札契約変更などを担当。今までの経験を生かして社内研修などの仕事もさせてもらっている。

現在も、常用薬もなくインフルエンザと新型コロナウイルスのワクチン接種だけの健康体であり、故郷に感謝している。楽しみは毎月のゴルフで、今年の目標はベストスコア「88」の更新である。将来は故郷の老木は引退、二酸化炭素をたくさん吸収する若い樹木に世代交代させ、老木には茸の原木の役目をとる。自分の中に棲みついてしまったゴルフの誘惑もあり、ゴルフと故郷と上手に付き合って年輪を感じていきたい。

結びに、会員の皆さま方にも穏やかでよい年となりますよう祈念申し上げます。



感謝、健幸元年(体、脳、心)

昭和38(1963)年生まれ

山田博道さん

日本道路㈱
元総括防災調整官

新年あけましておめでとうございます。

一昨年4月に国土交通省を早期退職し、7月から日本道路㈱に勤務し、今までとは違った環境で仕事をしています。

在職中は圏央道・東埼玉道路などの幹線道路の整備、防災など社会基盤の整備に携わることができ、少しは社会のお役に立てたのではないかと、大変ありがたく思っています。また38年間無事に勤務できたのは、ひとえに皆さまのおかげとあらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。当然、妻への感謝も忘れません(と、妻に書くよう言われました(笑))。

さて、早いもので今年還暦を迎えます。新たに生まれ変わった気持ちで過ごしたいと思っています。60歳からの15年は「黄金の時間」というそうですが、今考えていることは、第一に「健幸(体、脳、心)」です。まずは体力維持のために、週1回は公園での1時間半のランニングを続け、年1回は妻と海外旅行に行きたいと思っています。次に脳ですが、走ることは脳によいといわれていますので(アンデシュ・ハンセン『運動脳』サンマーク出版、最近のベストセラーです)、前記のとおりランニングを続け、歴史の“学び直し”や昔読んだ本の読み直しをしたいと思います。心の健康は、ストレスは脳にもよくないといわれていますので、ストレスをためないように生活したいと思っています。そして次の世代に何か恩返しをしたいと思っています。

最後に、これからの時間が「黄金の時間」となるように、いろいろなことに興味を持って、楽しく一步一步、歩いていきたいと思っています。

今後とも引き続きどうぞよろしくお願いします。



高尾山から想い出の圏央道八王子JCTを望む

推しは推せるときに推せ

昭和38(1963)年生まれ

山田弘幸さん

関東建設マネジメント㈱
元東京外かく環状国道事務所副所長

あけましておめでとうございます。

今年は5回目の年男、いよいよ還暦を迎えることになってしまいました。

還暦といえば「赤色の衣装」ですが、振り返れば3回目の年男を迎えたあたりから、「赤いユニフォーム」をまとって、全国のスタジアムはもとより遙かマンチェスター Old Traffordまで遠征しましたし、4回目の年男を過ぎ、図らずも独身に戻って以降は、緑やピンクなどカラフルな衣装で遠征。家着としても普段使いしているので、還暦だからといってあらためて赤い衣装をまとう必要は感じません。

60年生きてきましたが、人生は何が起こるか分からないものです。伴侶に先立たれたり、推しが突然卒業して25歳も年上の人と結婚したり、疫病で長期にわたって興行が中止になったり、自らの情熱がさめてしまったり……。

なので、ヲタク界限では「推しは推せるときに推せ」「干していい現場なし」など、現場(=ライブ)には万難を排して行くことが推奨(?)されているのですが、私も孫が3人いるリアルおじいちゃんですし、疫病のせいでまだいろいろ制限があって楽しみきれないこともあり干すことが多くなってきています(;。)

5回目の年男を迎え、決意新たに、プライベートも仕事も先送りしたり諦めたりしないで「推せるときに推していく」気概をもって生きていこうと思いますので、皆さま引き続きご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

結びに、早くコロナ以前の生活が戻ってくるのを祈って。



ライブ参戦の朝に



令和4年度 公益助成事業紹介

関東・水と緑のネットワーク拠点 令和4年度交流会

当協会は公益財団法人日本生態系協会との共催で、関東地域の身近な風景や自然、人との関わり・つながりを創出する拠点を「関東・水と緑のネットワーク拠点」として選定し、保全活動を支援しています。

令和4年11月20日（日）、さいたま市農業者トレーニングセンターにおいて、今年度の活動団体の選定授与式と活動発表会を開催しました。これにより、平成21年度から今年度までに選定された拠点は、延べ135カ所となりました。

コロナ禍のためここ2年中止していた選定団体の活動拠点の現地見学も、3年ぶりに実施。午前中は過年度（第7回）の選定地である芝川第一調節池を見学、午後には今年度（第14回）選定団体への選定証授与式を実施。さらに、今回選定された団体による活動紹介が行われました。

■令和4年度選定団体（6団体）

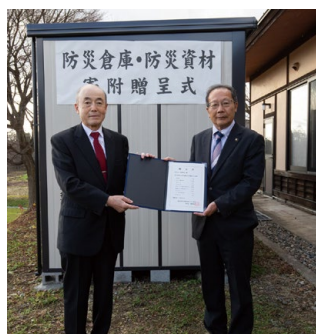
- ・森里（神奈川県厚木市）
- ・狭山丘陵トトロの森・自然再生の会（埼玉県さいたま市）
- ・大曽根の湿地ビオトープを守る会（埼玉県八潮市）
- ・一般社団法人 Garn Closs（埼玉県さいたま市）
- ・ままmaioka（神奈川県横浜市）
- ・清水建設株式会社（東京都中央区）



今年度（第14回）選定された団体の方々

道の駅へ防災倉庫・防災資材を寄贈しました

当協会では、地域防災力向上活動に対する支援として令和2年度から道の駅へ防災倉庫・防災資材の寄贈を行っています。今年度は、長野県中野市の「道の駅ふるさと豊田」と千葉県旭市の「道の駅季楽里あさひ」の2カ所へ、防災倉庫と毛布やブルーシート、非常用トイレなど防災用備蓄資材を寄贈しました。



「道の駅ふるさと豊田」での贈呈式

■これまでに防災倉庫等を寄贈した道の駅

年度	道の駅	所在地
R2	いちごの里よしみ	埼玉県吉見町
	富楽里とみやま	千葉県南房総市
	とみうら枇杷倶楽部	〃
R3	甘楽	群馬県甘楽町
	たかねざわ 元気あつむら	栃木県高根沢町
R4	ふるさと豊田	長野県中野市
	季楽里あさひ	千葉県旭市

関東地方防災エキスパート活動状況

令和4年9月～12月間の防災エキスパート活動は、河川系事務所から来年度出水期前堤防点検への参加依頼が多くあり、延べ132名の方に活動していただきました。



利根川上流河川事務所管内堤防点検の様子

■活動状況（令和4年9月～12月）

・基礎研修 水質事故・水質調査研修講師	10/6、11/17
・基礎研修 水防実習研修講師	10/20～11/29
・東京国道事務所管内徒歩パトロール	10/12～11/14
・富士川砂防土砂災害発生時合同防災訓練	11/21
・令和5年度出水期前 堤防点検	
荒川上流河川事務所	10/4～11/14
高崎河川国道事務所	10/12～11/16
利根川上流河川事務所	10/21～12/6
利根川下流河川事務所	11/2～12/9
江戸川河川事務所	11/7～12/19
荒川下流河川事務所	11/24～12/12
常陸河川国道事務所	11/22～12/20
霞ヶ浦河川事務所	11/21～12/7
渡良瀬川河川事務所	11/24～12/15
京浜河川事務所	11/9～12/27
甲府河川国道事務所	12/5～12/23

令和4年度 関東地方防災エキスパート支部別講習会を実施しました

平成21年4月28日付で、当協会（当時：関東建設弘済会）と国土交通省関東地方整備局との間で締結した「関東地方防災エキスパート」制度に関する協定に基づき、防災エキスパート活動の円滑化を目的として、支部別に講習会を実施しています。

今年度も新型コロナウイルス感染症拡大の影響が心配されましたが、関東地方整備局および関係事務所の協力により、令和4年11月30日（水）の甲府支部講習会を皮切りに12月15日（木）の水戸支部講習会まで、全ての支部で無事に講習会を実施することができました。

講習会には全支部約240名の防災エキスパートに加えて関東地方整備局・事務所職員の方々約80名と事務局も含め、約400名が参加しました。各支部の講習会では午前中に講習を行った後、午後には現地見学や講演が

実施されました。

首都圏四支部合同講習会は、昨年・一昨年はコロナ禍のため講習動画のWeb配信と資料送付による実施でしたが、今年度は12月6日（火）に東京臨海広域防災公園内のそなエリア東京オペレーションルームにて、3年ぶりに対面での講習会となり、整備局職員を含め約200名が参加しました。

■四支部合同講習会

(1) 「関東地方整備局における防災に関する取り組みについて」

工藤美紀男氏（関東地方整備局総括防災調整官）

(2) 講演「防災気象情報の今昔話」

平松信昭氏（（一財）日本気象協会 気象予報士）



水戸支部講習会での現地見学の様子
（那珂川緊急治水対策プロジェクト事業 大場遊水地）



四支部合同講習会の様子

■令和4年度 関東地方防災エキスパート支部別講習会実施状況

支部名	参加者数	実施日	講習会場	関東地方整備局講師	現場視察等
水戸支部	30名	12月15日（木）	アダストリアみとアリーナ	澤純平氏（防災情報調整官）	現場見学：那珂川緊急治水対策プロジェクト事業 大場遊水地建設現場
宇都宮支部	22名	12月8日（木）	栃木県教育会館	井上啓氏（防災対策技術分析官）	—
高崎支部	33名	12月12日（月）	ビエント高崎	青木孝夫氏 （災害対策マネジメント室長）	講演Ⅰ：「防災情報を活用して災害から身を守る 気象編」林孝夫氏 講演Ⅱ：「防災情報を活用して災害から身を守る 火山編」星野博司氏
大宮支部	53名	12月6日（火）	東京臨海広域防災公園 「そなエリア東京」	工藤美紀男氏 （総括防災調整官）	講演：「防災気象情報の今昔話」 平松信昭氏 「そなエリア」施設見学
千葉支部	49名				
東京支部	12名				
神奈川支部	17名				
甲府支部	17名	11月30日（水）	ベルクラシック甲府	中谷文治氏（防災室長）	現場見学：R4塩島沢砂防堰堤工事
長野支部	9名	12月9日（金）	ホクト文化ホール	井上啓氏（防災対策技術分析官）	講演：「自然災害後の早期復旧にむけて ——最近の事例を踏まえて」 近広雄希氏
合計	242名				

第35回 道のある風景写真コンクール

私たちの生活に欠くことのできない道。小中高校生を対象とした「道のある風景写真コンクール」も今回で35回目を迎えました。

今回も日常生活での写真、動物とのふれあいの写真、工夫して撮影した写真など、いろいろな一瞬を切り取った「道」のある風景の写真を応募いただき

ました。昨年に引き続きコロナ禍での募集となりましたが、応募作品数2,943枚、応募者数1,696人と、昨年より多くの応募がありました。

写真家の木村恵一先生、加藤雅昭先生、そして関東地方整備局道路部の丸山昌宏道路情報管理官、当協会の後藤敏行専務理事の4名による審査で

審査風景



入賞作品が決定しました。

入賞作品は関東の道の駅、千代田区役所ロビーなどで展示を予定しています。

主催：(一社)関東地域づくり協会／協力：国土交通省関東地方整備局

金賞

小学校の部

「夏をひきとめて」

中村綜太 (なかむら そうた) さん
茨城県 茨城大学教育学部附属小学校3年生



中学校の部

「とびだせ！ シャボン玉」

松島涼音 (まつし ますずね) さん
埼玉県 さいたま市立大砂土中学校3年生



高等学校の部

「絶対負けない」

ガラリオ メエー (がらりお めえー) さん
栃木県 鹿沼商工高等学校1年生



学校賞

小学校 茨城大学教育学部附属小学校
中学校 さいたま市立大砂土中学校
高等学校 向上高等学校

銀賞



小学校の部

「高速道路の下で川遊び」

坂井敦哉 (さかい じゅんや) さん
長野県 駒ヶ根市立東伊那小学校5年生



中学校の部

「雪の朝を歩く」

園部亜唯彩 (そのべ あいさ) さん
茨城県 茨城大学教育学部附属
中学校2年生



中学校の部

「ある夏の日の終わり」

山田愛結 (やまだ あむ) さん
群馬県 高崎市立倉渕中学校2年生



小学校の部

「初めてのおさん歩」

山崎実帆子 (やまさき みほこ) さん
神奈川県 横浜国立大学教育学部附属
鎌倉小学校3年生

「帰り道」

西納史由子 (にし のう しゅうこ) さん
長野県 伊那弥生ヶ丘高等学校2年生

高等学校の部



高等学校の部

「変なジャンプ選手権」

高木 唯 (たかぎ ゆい) さん
神奈川県 向上高等学校1年生



銅賞

小学校の部

「おんぶして どこまでも」	福田 士さん (ふくだ つかさ)	茨城県 茨城大学教育学部附属小学校3年生
「ありさん みーつけた」	佐藤千咲さん (さとう ちさき)	東京都 墨田区立緑小学校1年生
「ゆかたでウキウキ」	高木楓花さん (たかぎ ふうか)	神奈川県 相模原市立大野台中央小学校2年生
「線路の真よこの細い道」	金井政親さん (かない まさちか)	神奈川県 横浜国立大学教育学部附属鎌倉小学校4年生
「光の先」	笠井煌実さん (かさい こうま)	山梨県 市川三郷町立六郷小学校6年生

中学校の部

「県を股に掛ける!」	池本琴音さん (いけもと ことね)	埼玉県 さいたま市立大砂土中学校3年生
「価値観の違い」	岡崎俐央菜さん (おかざき りおな)	埼玉県 さいたま市立大砂土中学校3年生
「山」	福井優楓さん (ふくい ゆか)	千葉県 松戸市立第五中学校1年生

「animal way home」

平山恭太郎さん
(ひらやま きょうたろう) 3年生

「車両ブロッカー」

西山英心さん
(にしやま えいしん) 2年生

高等学校の部

「灯す」

大門聖空さん
(だいもん せいりゃ) 2年生

「夏の小道」

小野塚冬真さん
(おのづか とうま) 2年生

「虫送りの日」

反町天駿さん
(そりまち たかとし) 2年生

「ヤマタノオロチ」

玉城蒼翔さん
(たまぎ せうと) 3年生

「おもての私とうらの私」

長野結奈さん
(ながの ゆな) 1年生

安心・安全と環境への配慮、 新たな川づくりが 街づくりの基礎に 北千葉導水事業 第二導水路・大堀川・坂川



松戸排水機場の屋上から坂川を望む。かつてとは比べられないくらいきれいになり、近隣の人々の散歩ルートとして親しまれている

会員の方々に携わったプロジェクトの地を再訪していただき、苦労や喜び、エピソードさらには事業全体の効果などを語っていただく本シリーズ。第46回は、北千葉導水事業の2回目。

福留勉さん、堀部正文さん、田上祐二さんと現場を訪ねました。

福留勉さん

昭和44年入省、平成18年地方事業評価管理官を最後に退職。



堀部正文さん

防災工業株式会社取締役技術部長。昭和49年入省、平成26年品木ダム水質管理所長を最後に退職。



田上祐二さん

株式会社建設環境研究所理事、技師長。昭和50年入省、平成27年京浜河川事務所副所長を最後に退職。

① 拡幅工事中の坂川（新松戸
周辺）

（写真提供：江戸川河川事務所）

② 富士見橋から拡幅された坂
川を望む。折しも、護岸補
修工事の最中。老朽化した
護岸ブロックの入れ替えな
どが定期的に行われている



③ 坂川上流部の軟弱地盤の施工状況
（写真提供：江戸川河川事務所）



④ 施工当時を振り返る。幸田橋から
上流の富士見橋あたりまでは特
に地盤が軟弱で苦労したと話す

街づくりの基礎に！ 自治体と共に河川と公園を一体整備

北千葉導水路は、坂川流域と手賀沼周辺の洪水を軽減するほか、坂川・大堀川の水質浄化、首都圏への都市用水の供給など、幾つもの役割を果たす流況調整河川として計画された。江戸川工事事務所（現・江戸川河川事務所）と利根川下流工事事務所（現・利根川下流河川事務所）によって、利根川と江戸川を結ぶ延長28.5kmの導水事業が行われたのは昭和49（1974）年から平成12（2000）年のことである。

江戸川工事事務所は第二機場以西を担当。大堀川沿いに13.7kmの第二導水路（埋設管）を施工し、それに伴って大堀川の河道を改修。利根川の水を導水する坂川も拡幅して放水路を整備し、坂川流域の洪水防御のために松戸排水機場も建設した。

この北千葉導水事業のために設置された開発工務課で事業に携わったのが福留勉さん、堀部正文さん、田上祐二さんだ。福留さんは平成3年8月から平成6年6月まで、開発工務課の課長を務めた。堀部さんは昭和61年5月から昭和63年8月に開発工務課設計第二係長、平成9年4月から平成12年

3月には開発工務課長として、田上さんは平成元年11月から平成4年3月まで開発工務課開発工務係長として、それぞれ同事務所に勤務した。福留さんと田上さんが約半年間同時期に在任した以外に重なる時期はないが、3人がともに「大変だったけれど、面白い仕事だったね」と振り返る。

堀部さんは昭和59年から本局河川工事課で江戸川工事事務所が進めていた北千葉導水事業の設計審査を行っていたが、その継続工事を自ら直接担当することになった。

「かなりの地盤改良が必要な工事で大変そうだと思っていたものを、自分が担当することになったわけです。昭和61年の着任時には、大堀川の埋設管敷設が始まり、坂川拡幅の最盛期でした。坂川は、宮園団地がある幸田橋から上流の富士見橋あたりまでの地盤が特に緩かったですね。事前に知っていたので覚悟はしていましたが、実際に施工が始まると、思った以上の超軟弱地盤で、まいりました」（堀部さん）

田上さんも、これにうなずく。

「ピート（泥炭）層という弱い地層で、地盤改良にDJM工法（粉体噴射攪拌工法）を採用しましたが、縦方向の荷重には耐えても横方向にはどうしても滑ってしまう。付近の団地では事前調査と事後調査を行い、工事による変状には細かく補償をし

⑤ 豊四季地区は市街地のため、導水は地表から25m～30数m下に直径4mのシールドを施工して通した。近隣の小学生に、セグメント内側に絵を描いてもらった
(写真提供：江戸川河川事務所)



⑥ 導水路を通ってきた利根川の水の一部は、野々下水辺公園の水源としてここに湧き出してくる。周辺の木々も大きく育った



⑦ 第2導水路を通ってきた水は、ここで地表に姿を見せる。二段構造の上部から流れ落ちる滝は、利根川からの導水がなされていることを市民に伝え、癒しの場となっている
(写真提供：江戸川河川事務所)



⑧ 完成当時の野々下水辺公園。子供たちの遊び場として親しまれている
(写真提供：江戸川河川事務所)

ました」(田上さん)

このような地盤の問題や、市街地での工事ゆえの施工の難しさ、施工中にも台風により出水が起るなど、困難は多々あった。その中でも、福留さんにとって印象深いのは、坂川・大堀川を改修する際に、埋設管上部を含めたオープンスペースに、自治体と協議しながら以降の街づくりの基礎となるような公園施設を一体整備したことだ。

「平成3年に当時の建設省と自治省が、川づくりと公園・緑地整備を一体に行うための『地方特定河川環境整備事業』を創設、大堀川の柏市区域をその第1号として取り組むことになったのです。坂川は流山市、松戸市と一体となって整備しました。自治体の若手技術者の皆さんとさまざまな意見を交わして計画を進めたのが今でも良い思い出です」(福留さん)

大事業には反対もつきものだが、後々「北千葉導水事業があったからこそ、このような公園ができ、街づくりの基礎ができた」と言ってもらえるようにしたいという思いは、福留さんが仕事に打ち込むためのモチベーションの一つになった。

「将来、地域の皆さんに末永く喜んでもらえるようにということを常に頭に置いていましたし、事務所内でもそれを忘れないようにしようと声をかけていました」(福留さん)

坂川・大堀川の多自然型川づくり

大堀川沿いには約6kmにわたり断続的に遊歩道が続いている。第二導水路(埋設管)の上部は維持管理のために開放

スペースとして確保しなければならないため、その部分を季節感あふれる遊歩道として活用したのである。一直線では歩く人が疲れてしまうため、遊歩道には緩やかなカーブなど変化のある線形にして楽しんで歩けるようにし、桜並木も整備した。

大堀川沿いにもともとあった公園を拡張整備した高田緑地にはシンボルツリーとして大きな柳を植えた。「どんな木がよいか、かなり勉強しました」と福留さん。川を意識して親しんでもらえるよう、護岸の形状も工夫して緑地内から水辺に下りられるようにした。

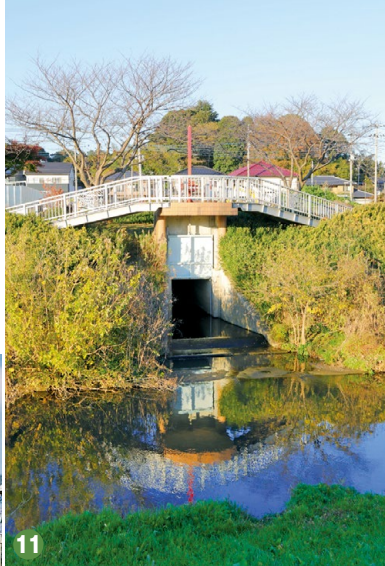
豊四季シールドから地表への出口部をボックスカルバートで二段構造にし、上部には利根川からの導水の一部が湧き出る水路を造り、親水公園として整備。緑地の南端で滝のように流れ落ちて、下部を流れる導水の本流と合流するのである。植樹した木々は20年の時を経て大きく育ち、現在は野々下水辺公園として近隣の人に親しまれている。

きれいな川と公園ができれば、そこを基点に街の姿は変わっていく。現地を歩きながら「こんなところまで住宅ができていくね」「平日だけれど利用する人がずいぶん多いね」と、かつての地域の様子を知る3人は驚いた様子。狙ったとおり、水と緑の豊かな環境づくり、それによる地域の活性化は果たされたといえるだろう。

福留さんたちが事業に携わった時期は、環境保全意識の高まりにより、公園整備だけでなく川の整備でも「多自然型川づくり」が志向されていた。「多用されていた三面張コンクリートの護岸はあまり評判が良くなかったのです」と福留さんは苦笑い。



10



11



9

⑨ 大堀川沿いの埋設管の敷設状況

(写真提供:江戸川河川事務所)

⑩ 大堀川の排水樋管管理橋にあるレリーフ。「うなぎの水切場」として知られた川の伝承をモチーフにしている

⑪ 排水樋管の管理橋を、従前のように「近づけない」のではなく、むしろ人々が「川を眺める場」になるように工夫した

⑫ 大堀川沿いにある高田緑地。シンボルツリーの横で導水管の位置を確認する3人。直径3.2mの導水管が、地表から2.6m下に2条埋設されている



12

「大堀川はカゴマット（鉄線籠に石を詰めたもの）工法で施工しその上にもともとあった土をかぶせました。河床もコンクリートで固める案があったのですが捨て石などで自然そのままになるようにしました」（田上さん）

「坂川でも、水が接する低水敷はコンクリートブロックの護岸ですが、上部は環境に配慮した植栽式ブロックとなっています。今はなくなりましたが、完成時には浮島を配置して鳥や魚が休息できるようにし、防護柵には自然木を利用するなど、自然環境になじむように工夫したのを覚えています」（堀部さん）

「きれいな川」を維持するため 地域の人々に親しまれる川に

堀部さんは完成までの数年に再びこの事業に携わった。非常に多岐にわたる事業だったが、「大変でしたが職員全員が一丸となりメリハリをつけて仕事ことができました。やりがいのある現場でしたよ」と話す。その終盤に施工したのは導水保全水路だ。

「坂川にはもともと市内の生活雑排水を含む支流がいくつも流れ込んでいました。せっかく利根川の水を利用してきれいにしようとしても、そのままでは意味がありません。そこで、下水道が整備されるまでの当面の間、主な生活雑排水は、坂川に混ざらないように設置した導水保全水路で分離して下流の浄化施設の方に流すことにしたのです」（堀部さん）

坂川・大堀川の水質の改善は事業の大きな目的の一つだった。利根川の水を入れることである程度は浄化できる。しかし、根本的な解決のためには地域の人々に川を身近に感じて

もらう必要があると福留さんは考えたそうだ。

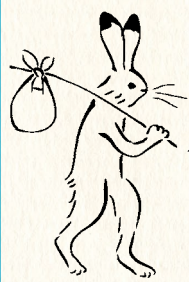
「川は危険だという意識からどうしても立ち入らせないような設備を造ってしまいましたが、坂川・大堀川では、できるだけそれを避けました。人々から川の様子がよく見えるようにすれば、以前より汚いとかきれいになったとか、変化が目に残りやすくなります。それが、どうすれば川がきれいになるか、考えてもらうきっかけにもなると思います」（福留さん）

川に親しんでもらう。そのために、大堀川では、通常は立ち入れないようにしてしまう排水樋管の管理橋を川に張り出すテラスにしたり、まだ清流であった江戸時代の様子を知ってもらえるよう、説明書きやレリーフのパネルも用意した。市の担当者からアイデアが寄せられ、一緒に検討したという。さまざまな工夫のかいあって、手賀沼・大堀川は全国水質ワースト1の汚名を返上することができた。

かつては洪水の被害が非常に大きかった坂川周辺も、坂川の改修と松戸排水機場の稼働によって浸水被害はほとんどなくなった。ここ数年の豪雨でも効果を発揮している。人々の安心感は、周辺自治体の人口増加の様子から見て取れる。

「大堀川の近くにも、大雨になると水に浸かってしまう幼稚園があったのですが、その被害もなくなりました。北千葉導水事業は、治水、利水、環境の面で大いに効果を発揮していると思います。地域の街づくりの礎にしてもらえたよううれしいですね」（田上さん）

安心安全な街づくり、緑と水の風景がある街づくりのために、北千葉導水事業が果たした役割は大きい。



隣宿と一体となり流通を支えた 小原宿

江戸時代、東海道などの
街道に設けられたのが宿場です。

旅人を迎え送り出した宿場の古今の様子を、
関東地方の各地に訪ねるシリーズ。
第10回は甲州街道9番目の宿、小原宿です。



現在の甲州街道沿いの
様子

仮名垣魯文による道中記『身延参詣甲州道中膝栗毛』。
(提供:山梨デジタルアーカイブ(山梨県立図書館))



小原宿を通行した人々

日本橋から始まる甲州街道は、東京都、神奈川県、山梨県を通り、長野県下諏訪宿で中山道と合流します。全45宿のうち、神奈川県下の4宿を「相州四カ宿」と呼びます。今回取り上げる小原宿もその一つ。相模国津久井郡の山間(現在の神奈川県相模原市緑区)に存在した、規模2町半(約300m)の小さな宿場です。

天保14(1843)年の『甲州道中宿村大概帳』によれば、宿内家数は61軒。うち本陣1、脇本陣1、問屋1、旅籠7軒で、宿内人口は275人。甲州街道きっての難所・小仏峠こぼとけとうげの西側という重要な位置を占めていました。宿場の南側を流れる相模川の鮎こさいあゆは、「御菜鮎」として幕府に献上されていました。宿場が設けられた正確な時期は不明ですが、慶長9(1604)年に行われた津久井領内総検地の記録によれば、このとき既に小原宿が設置されていたようです。

近世中期以降の甲州街道は、富士信仰の高まりとともに、富士山や身延山を詣でる旅人たちに利用されるようになりました。安政4(1857)年に成立した『身延参詣甲州道中膝栗毛』は、幕末から明治にかけて活躍した戯作者・仮名垣魯文による、身延山参詣を題材とした道中記です。小原宿の頁には、弥次郎兵衛と北八、物乞いの軽妙なやりとりが描かれています。

2つの宿で1つの宿場機能を果たす“片継ぎ”

当時甲州街道を經由して参勤交代を行っていたのは、信州の高島藩・高遠藩・飯田藩です。甲州街道は他の街道に比べ公用通行が極めて少なく、複数の宿で1つの宿場機能を果たす形が珍しくありませんでした。小原宿の場合、西隣の与瀬宿と共に「片継ぎ」という特殊な輸送を行っていました。小原宿と与瀬宿の間の距離は19町(約2.1km)あり、小原宿が江戸から来た荷物を与瀬宿を越えて吉野宿へ送る一方、与瀬宿は西から来た荷物を小原宿を越えて小仏宿まで送りました。与瀬村全体の石高は568石あり、うち小原宿は178石、与瀬宿が390石。より石高の高い与瀬宿が、負担の大きな小仏峠越えを受け持ったのです。慶長11(1606)年、香西勝次郎・田村八右衛門が与瀬宿の間屋内蔵助に宛てた伝馬請取手形には、「羽柴三左衛門の荷物を小仏宿まで輸送する。そのための伝馬50疋を確かに請け取り申した」という旨の記述があり、宿場の設置当初から両宿が片継ぎの宿であったことが分かります。

小原宿本陣周辺を歩く

高尾山方面から小仏峠を下り小原宿に至る途中に、小原の一里塚跡があります。日本橋から数えて15番目の塚です。塚は距離の目印のみならず、馬や駕籠の賃金を支払うとき

大名が宿泊した上段の間。
表玄関から奥に向かって
控の間、中の間、上段の間
と続いている
(撮影協力:小原宿本陣)

神奈川県下で唯一現存
する小原宿本陣。平成8
(1996)年に県の重要文
化財に指定された
(撮影協力:小原宿本陣)



本陣正門前。石碑文は昭和を代表する前衛書家・井上有一の手によるもの
(撮影協力:小原宿本陣)



JR中央本線長久保架道橋。近辺に小原の一里塚が存在した



毎年11月に開催される小原宿本陣祭では、旧甲州街道を大名行列が練り歩く。奴の舞や鉄砲隊の実演も見どころ
(提供:相模湖観光協会)

の目安でもありました。中央自動車道の敷設により消滅し、現在はJR中央本線高架下に一里塚の所在を示す看板が立つのみとなっています。

近世の紀行文『津久井日記』に「下りとは、廻る角にいかめしき公の制札場有、是小原宿なり」とあるように、坂道を下って国道20号線に合流すると、ほどなくして本陣と高札場が旅人たちを出迎えます。小原宿本陣は、神奈川県下で唯一現存する大名の定宿です。清水家が代々本陣役を務めていました。江戸後期の建築とされ、桁行13間梁間7間、4層のかぶと造りの入母屋風の建物です。北側の奥座敷が大名が宿泊した上段の間で、徳川家より拝領したドウダンツツジや泰山木が植えられた築山を一望できます。本陣2階は宿泊や養蚕作業に使われていた場所です。ずらりと並ぶ織機や古道具からは、明治時代に営まれていた絹織物産業の様子がうかがえます。

本陣を出て甲府側に進むと、玄関先に「小松屋」「永楽屋」といった屋号の掛かる古民家が見えてきます。かつて小原宿で旅籠屋を営んでいた家々です。旅籠は、大名の家来たちが本陣や脇本陣に泊まりきれない場合の控えとして利用されました。現在残る建物は築100年以上にもなり、軒下を深く差し出した出桁造りが特徴。明治28(1895)年の火災で小原宿本陣周辺の町並みは失われてしまいましたが、このように随所でかつての宿場を偲ぶことができるのです。

小原宿本陣周辺には旅籠屋を営んでいた民家が残る(明治以降の再建)。玄関先の屋号が目印



東京の街並みを変えた震災

聖橋はJR御茶ノ水駅付近を流れる神田川とJR中央線および外堀通りに架かる鉄骨コンクリート開腹アーチ橋です。昭和2(1927)年に震災復興橋梁の一つとして新たに架設されました。優美なアーチ橋と桁橋で構成され、そのモダンな佇まいから日本のコンクリートアーチ橋の最高傑作とも言われています。

大正12(1923)年9月1日11時58分、相模湾を震源とするマグニチュード7.9の地震が発生。関東大震災です。東京では昼食の煮炊きから各所で火災が発生し、瞬間に燃え広がった火により、市域の約4割が焼失。東京の街は灰燼と化しました。

震災翌日に新内閣が成立、内務大臣には元東京市長の後藤新平が就任しました。甚大な被害に遷都論まで持ち上がる中、後藤は復興を明言。9月27日に「帝都復興院」が設立されると総裁の座に就きます。後藤は「帝都ノ復興ニ資シ更ニ都市ノ面目ヲ一新」するとしてインフラ整備を含む都市計画を主張。震災復興は“城下町・江戸”から“近代都市・東京”への一大転換事業にも位置付けられました。

帝都復興院には実務に関わる7つの部局が置かれ、土木

局長には鉄道省の技師、^{おお た えんぞう}太田圓三が抜擢されます。太田は「鉄道はじまって以来の天才」と評され、慣例にとらわれない自由な発想と強い実行力で知られた人物でした。

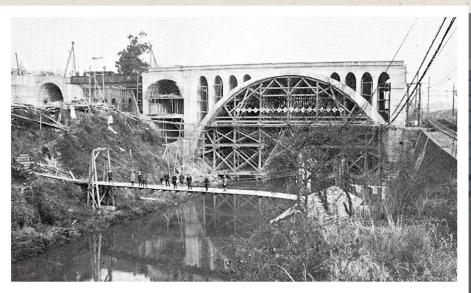
東京の壊滅的な被害は、都市基盤の整備を欠いた“表面的近代化”が招いたと考えた太田は、交通・防災・衛生・美観などが一体となった「文明的都市」の建設を目指します。また真の近代化には、西洋のものまねではない日本独自の技術や文化の醸成が必要だとして、隅田川復興橋梁群の設計に際し「計算できない橋を架けろ」と鼓舞するなど、今までにない、オリジナリティあふれる新しい橋の創造を推奨したのです。

日本のモダニズム建築の先駆け

聖橋は付近の小川町交差点の混雑緩和のため、市街地を貫く新たな街路の一部として計画されました。構造設計には復興局橋梁課の技師であった^{なる せ かつたけ}成瀬勝武が、意匠設計には通省官繕課から出向していた建築家の^{やまだ まもる}山田守が当たりました。

人工河川である神田川は地盤が良好で、なおかつ舟運が盛んだったため、美観にも優れたアーチ橋が採用されます。山田は聖橋の設計に当たり、曲線や曲面を多用するなど、自身が

建設中の聖橋。木組みの足場が美しい。鉄骨の組立は宮地鐵工所(現:宮地エンジニアリング)が、施工は清水組(現:清水建設)が手掛けた(提供:紅林章央氏)



関東の土木遺産 第47回

コンクリートアーチ橋の傑作

聖橋

東京都

土木学会では現存する貴重な土木構造物を調査し、「日本の近代土木遺産」として発表しています。

それらの土木遺産の中でも特に価値があるとされる選奨土木遺産。第47回は東京都千代田区にある聖橋です。



修復された聖橋。竣工当時のモダンな意匠がよみがえった



側径間の隔壁スリットもパラボラ・アーチ

影響を受けたドイツ表現主義のエッセンスを取り入れました。成瀬も、構造の力学的・機能的合理性こそが橋梁美の根本であるとして、親柱や装飾を省くことを提案します。当時東京では、アーチ側面を壁で塞ぎ石張りで装飾を施した「充腹アーチ橋」が一般的でしたが、軽量で適応スパンの長い「開腹アーチ橋」を選択。壁面はモルタル仕上げのみとしました。

二人は議論を重ね、何度も設計プランを修正しました。成瀬はアーチの曲線を、一般的な欠円から応力に対してより効率的な変垂曲線に変更。山田も直角に接合した垂直壁を、自身の代名詞的なモチーフである「パラボラ・アーチ」に変えるなど、プランの変遷からは二人の試行錯誤の跡がうかがえます。

大正13(1924)年9月に聖橋は起工。あらかじめ組んだ鉄骨を抱き込むようにコンクリート打設するメラン工法で造られました。昭和2(1927)年7月に完成した聖橋はその斬新な意匠で、東京の復興と新しい時代の到来を人々に強く印象付けたのです。

思いを受け継ぐ修復

聖橋について、選奨土木遺産選考委員長の紅林章央さんは「太田が示した“文明的都市・東京”のグランドデザインを軸

に、若手技術者の成瀬と山田が最先端の橋を造り上げた。それぞれの思想や個性が重なり合うことで、時代を超えて愛される橋ができたのだと思います」と話します。

聖橋は“将来に残すべき「著名橋」”であるとして、平成27(2015)年に大規模な補修工事が行われました。紅林さんは都の職員としてこれを担当。その際、平成2年の修景事業で石張り風に加工された壁面を、竣工当初の外装に復元。橋灯も当時の図面や絵葉書を基に色や形を再現しました。

「デザインは設計者の思いが形になったもの。それを受け継ぎ、できるだけ当初の姿のまま次の世代へ伝えたい。それが彼らに対するリスペクトだと思っています」と紅林さん。

平成29年「関東大震災の復興橋梁」であり、「後に土木と建築の分野で各々大家となった、成瀬勝武と山田守が手掛けた鉄骨コンクリートアーチ橋」であるとして聖橋は選奨土木遺産に認定されました。

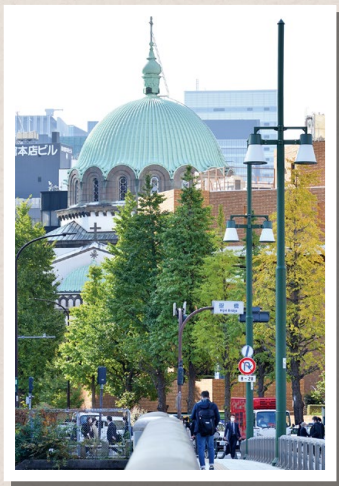
成瀬は後年、復興事業を契機に日本の橋梁技術は飛躍的に発展を遂げたと回想しています。竣工からまもなく100年を迎える聖橋。当時の技術者たちの志と彼らが示したモダンズムの萌芽が今なお東京の暮らしを支え続けているのです。



「聖橋」の由来は東京復活大聖堂（ニコライ堂）と湯島聖堂をつなぐことから。公共設備の名称を公募したことも先進的だった



側径間は鋼鉄桁だが、外側の桁にコンクリートを巻いて中央径間との一体感を演出している。景観への配慮がうかがわれる



橋の上からの眺め。JRと地下鉄が交差する様子は、東京の象徴的な風景として映画やドラマに登場することも多い

成瀬勝武。建築や芸術に造詣が深く自身で写生もした。後に日本大学理工学部教授・構造設計家として活躍（提供：紅林章央氏）



山田守。所属した「分離派建築会」は日本の近代建築運動の嚆矢。後に日本武道館や京都タワーを設計（東海大学建築会ウェブサイトより転載／協力：山田守建築事務所）

開腹アーチ構造。特徴的な小アーチは山田が好んで用いた先端の尖ったパラボラ型



会員のひろば

このページは
会員の皆さまの
投稿によるページです

東京マラソンに出走



私は趣味が多そうだからと、今回編集委員から寄稿のお声がけをいただいた。そこで自分の趣味について改めて考えてみた。

まずマラソンだが、もう20年以上継続している。若い頃からゴルフにも親しんできた。最近は先輩OBの皆さんから誘っていただく機会も増えた。そのほか、故郷の富山で野山を駆け巡っていた頃から川や海で釣りも嗜んでいる。

マラソン

マラソンを始めたきっかけは、相武国道事務所管内の国道20号で開催された「全関東八王子夢街道駅伝競走大会」だ。

大会を後援する事務所として参加することになり、近くの浅川堤防で選手を決める試走会を行った。実は内心では少々自信があり、十分に走れるはずであった。ところがまったく思うように速く走れず、とても悔しい思いをした。それが本格的にマラソンを継続するきっかけとなった。「悔しさが走る原動力」のせいか、残念ながらいまだに完走の喜びは実感できていない。

その後、フルマラソンやトレイルランにも挑戦するようになり、日本で最

富士山 8 合目あたりで一休み



無事に富士山登頂！



も厳しい大会といわれる富士登山競争に参加するようになった。富士吉田市役所から山頂までの練習登山を10年ほど続けているが、本番では山頂まで完走できていない。五合目まで制限時間内に走り、山頂コースの権利を獲得したことは一つの成果と言えよう。富士山の麓から山頂までのコースを制限時間内に制覇し、富士吉田市長から登頂記念の表彰をいただいたこともある。

先輩OBのご子息が箱根駅伝に出走したのを機に、マラソン仲間みんなで小田原から芦ノ湖の5区を年末に走るようになった。駅伝選手たちへの激励の気持ちをこめて年末恒例のイベントとして続けている。

ゴルフ

私は、誰一人ゴルフをしていないような片田舎で育った。当時流行っていた漫画『プロゴルファー猿』に感化され、木の切れ端でクラブを自作して地面に穴を掘ったコースでゴルフのまねごとをしてよく遊んだ。高校生の頃には担任の先生からお古のクラブを譲り受け、自宅近くの誰も来ない山頂公園に私設コースを作り、友人とラウンドを楽しんだ。

社会人になって初めてのラウンドでは、ハンデのおかげで104のスコアにもかかわらずダントツで優勝した。ただし40年ほどたった今でも、残念ながらスコアは安定して低空飛行である。それでも気持ちはいつも「目指せ80台」でラウンドに臨んでいる。

私の趣味



西尾文宏

株式会社パスコ東日本事業部技師長
元関東地方整備局東京国道事務所副所長

ホールインワン達成!



現在、諸先輩に誘われる機会が増えて楽しくラウンドしている。3年前にはホールインワンも経験した。次に達成した時のために、地域づくり協会ご紹介のゴルフ保険に入ったので、今後は安心だ。

ゴルフが人生を豊かにするのか、人生が豊かであればゴルフを楽しめるのか。自問自答しているが、「ゴルフってやっぱり良い

ものだなあ」とつくづく感じているこの頃である。

釣り

帰省した際はいつも「天然のいけす」富山湾で堤防釣りを楽しんでいる。寒ブリとまではいかないがアジ、キス、カレイなどの地魚をゲットして、自分でさばいて酒の肴にして楽しんでいる。昨年は、東京湾で江戸前のタコを釣っておいしくいただいた。

これからもお世話になっているOBや友人の皆さんと体を動かす趣味をできるだけ長く楽しみたいものである。



富山湾のアジとホッケ

会 員 情 報

令和4年11月1日～
50音順・敬称略

新会員をご紹介します 新しく12名の方々が入会されました。これからよろしくお願いいたします。

氏名	現勤務先
岩田 美幸	(一社) 日本建設業連合会
大野 昌仁	(一社) 日本建設業連合会
大庭 孝之	(株) 建設資源広域利用センター
岡積 敏雄	(株) 東京建設コンサルタント
尾澤 卓思	青木あすなろ建設(株)
金澤 裕勝	(株) 建設技術研究所

氏名	現勤務先
川嶋 直樹	古河機械金属(株)
川瀧 弘之	(一財) 道路交通情報通信システムセンター
富樫 篤英	(一財) 建設業技術者センター
三橋 さゆり	(一財) 日本建設情報総合センター
若林 伸幸	(一社) 全日本建設技術協会
渡邊 泰也	飛鳥建設(株)

お悔やみ申し上げます 謹んで哀悼の意を表します。

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
清水 満	令和4年5月	河川部 電気通信課長補佐
杉山 幸夫	令和4年8月	相武国道 出張所長
相澤 宏	令和4年9月	利根上 建設専門官
鈴木 賢治	令和4年10月	利根上 契約事務管理官

氏名	逝去年月	建設省(現国土交通省)退職時職名
寺門 康友	令和4年10月	総務部 調整官
畠山 伸一	令和4年10月	関東 河川部長
辻 靖三	令和4年12月	土木研究所 所長
小布施隆春	令和4年12月	河川部 河川工事課長補佐

編集委員

● [関東地域づくり協会]

澤田 晋

辰野 剛志

中村 一夫

野橋 明彦

前田 隆徳

山下 眞治

[会員]

田中 良彰 (大成建設(株))

望月 美知秋 ((株) 日水コン)

(編集委員 Y・S)

最後に、会員の皆さまにとって穏やかな良い年になりますようお祈りいたします。

帝釈天は皆さんご存じ「寅さん」で有名ですが、初詣の帰りに近くにある山本亭に寄ってお茶をするのが家の定番になっています。山本亭は地元ゆかりの山本工場(カメラ部品製造)の創立者である山本栄之助翁の自宅を葛飾区が取得したもので、平成3年から一般公開されています。昭和初期独特の洋風建築で、池泉・築山・滝などを設けた書院庭園もあり、ゆったりと静かに時間が過ぎるのを満喫できるのが気に入っています。近くには矢切の渡しなどもありますので、機会があれば立ち寄ってみてはいかがでしょうか。

わが家では、恒例になっている帝釈天への初詣に行ってきました(妻が若い時に柴又に住んでいた)。天候に恵まれたこともあり昨年度に比べ人出は多く、参拝者の皆さんからは笑顔が見られ今年が良い年になりそうな予感を感じました。

あけましておめでとうございます。いまだ新型コロナウイルス感染症が収束しない中、皆さまはどのように新年をお迎えになったでしょうか。

編集委員会だより

ピックアップ

第24回

関東の道の駅

若い人々にアピール！ 豊かな自然を楽しめる 滞在型道の駅



道の駅
「たかねざわ
元気あっぷむら」



滞在してゆったりとした時間を
過ごせる道の駅「たかね
ざわ 元気あっぷむら」

令和2年4月に、温泉施設をリニューアルして誕生した道の駅「たかねざわ 元気あっぷむら」。高根沢町ののどかな田園風景と豊かな自然が楽しめる滞在型の道の駅です。イチオシは写真映え抜群のグランピング施設！「県外から若い人々を呼び込みたい」と地域ぐるみでさまざまなイベントも開催しています。

“グランピング”を目玉に、県外から若い人々を呼び込む

栃木県高根沢町は宇都宮市街地から車で約30分、町の約5割を水田が占める米どころです。道の駅「たかねざわ 元気あっぷむら」は、町道沿いの小高い丘の上に位置し、周囲には緑豊かな田園風景が広がっています。

「県道や国道に面しているわけではないので、この場所を目的に訪れてもらい、滞在して楽しんでいただける施設を目指しています」と話すのは山本絢哉駅長。その言葉通り、コンセプトは“行きたくなる場所、ここにしかない体験”。他にはない“非日常”を体験できるように、地元の農産物やそれらをもとにした商品、飲食や宿泊などのサービスを提供しています。目玉は敷地内にある人工池を囲むように整備されたグランピング施設。テラスでバーベキューができ、別棟の温泉施設も利用できます。

「グランピング施設で県外の人、特に30代～40代の親子連れにアピールし、リピーターとして高根沢町を訪れてもらえるような魅力的な施設にしていきたい」と山本駅長。若い人々に向け、ウェブサイトやチラシなどのデザインにもこだわっています。

*「グラマラス」〈魅惑的な〉と「キャンピング」からなる造語。自分でテントや道具などを用意しなくても楽しめる豪華なキャンスタイル。



管理運営を行う塚原緑地研究所の山本絢哉駅長（左）と運営企画課マネージャーの本間公雄さん



華やかな味わいの道の駅オリジナル日本酒も販売

地域ぐるみで取り組む地域活性化

地元出身のスタッフにとっても「再発見が多々あります」と話すのは運営企画課マネージャーの本間公雄さん。

「中央に位置する円形広場では、訪れた人に地元の歴史や文化を知ってもらえるような企画展示をはじめ、農業体験のワークショップやマルシェなども開催しています。県外からのお客さまは徐々に増えており、年齢層も下がってきています」（本間さん）

地元の農家や事業者の中には産業の停滞に危機感を覚えていた人も多かったといいます。そのため、道の駅を拠点として高根沢町の魅力を伝えられるよう、近隣の畑での収穫体験や生産者による米の直売など、地域の皆さんは連携活動にも協力的です。高根沢町との関係も緊密で、地域活性化に地域ぐるみで取り組んでいます。

「高根沢町のランドマークとして、さらに盛り上げていきたいですね」と山本駅長。リニューアル以降、コロナ禍で思うように活動できなかったこともあり、ようやくスタート地点に立ったところ。日々、新たな魅力づくりに奮闘しています。



地元の野菜や果物を販売する直売所。秋は果汁たっぷりのにっこり梨、冬は数種類のいちごが並ぶ。もちろん高根沢町自慢の米も！



おしゃれなグランピング施設は週末には予約でいっぱい！テラスでバーベキュー（食材も料金に込み）が楽しめる

米粉をベースに使った「高根沢ジェラート」も人気



広場を利用してマルシェや農業体験会を開催

